

## 国際ワークショップ

### 「学術資料としての『型紙』—資料の共有化と活用に向けて」

#### 発表要旨集

10月29日（土）

#### 主旨説明 鈴木桂子「国際的な型紙研究の基盤構築と活用に向けて」

近年、型紙に対する学術的な関心が高まり、これに伴い、型紙が世界各地で所蔵されていることが明らかになりつつある。立命館大学アート・リサーチセンターが関係する様々な研究プロジェクトにおいても、型紙は、京都の伝統産業資料として、また近代染織資料として、また歴史的・世界的なプリント・メディア資料として、様々な研究の重要な結節点であると認識されている。その一方で、きもの産業構造の変化とともに型紙の製造に携わる人口の減少や資料の散逸に対して危機感が高まっている。

このような状況の下、型紙の研究者や所蔵機関が連携をとりながら国際的な型紙研究の基盤構築と活用を進めるべき時期を迎えている。本ワークショップは、大量に現存する型紙を整理し、その情報を蓄積・共有、調査・研究するため、(1) 具体的な調査方法、(2) 研究の進め方、(3) データベース化に向けての課題等の問題点と課題、及び実践的なノウハウを共有することを目的とする。

#### 基調講演 生田ゆき「『道具』から『資料』へ—これからの型紙研究へ向け」

型染の道具として発展してきた型紙。多種多様な文様の妙と、精緻な柄を彫り抜く技術は多くの人々を魅了してきた。特に19世紀後半以降、型紙が大量に欧米に輸出された事実が明らかになるや、型紙に注がれる眼差しは熱を帯びる一方である。

他方、型紙研究には依然として大きな壁が横たわったままである。染色の道具として扱われた時代が長かったために、型紙の生産、注文、流通についての文字情報が圧倒的に不足しているのだ。

この現状を打破するためには、型紙を解読すべき資料として見直す態度が必要となる。それには、型紙についての、加工方法の変遷、彫刻技術の発展、染色技法の差異など、型紙の「現場」に根差した情報だけでなく、特権的株仲間の形成による型紙の独占販売体制という特殊な歴史的経緯についての知識も必要となる。

確かに型紙は従来の美術史的な手法による分析は困難である。翻ってそれは、既成概念を超えて、染色史、服飾史、さらに経済史、外交史などとも連携することにより、新たな学問の地平が開かれる可能性を示唆するものである。本発表では、国内外で行った様々な調査の結果をもとに、これからの型紙研究のあり方を提案していきたい。

## 高木陽子「技法や媒体を超えた型紙図案のハイブリディティを考慮する」

型紙の図案は、技法や媒体を超えてハイブリッドの造形を作ってきた。本発表では、近代デザインの創始者の一人アンリ・ヴァン・ド・ヴェルド (Henry van de Velde, 1863 - 1957) をとりあげ、19 世紀末から 20 世紀初めにかけて型紙とバティックに同様の意匠を発見し、平面デザインに応用していた例を示す。

この問題は、長期のスパンで地球を循環するがごとく受容・応用されてきた染織の図案研究と、そのスピードが飛躍的に早まる近代デザイン研究にまたがり、美術史、デザイン史、染織史、経済史、人類学、グローバルヒストリーなどの観点から研究できる。

発表者は、西欧のジャポニズムの観点からヴァン・ド・ヴェルド研究をおこない、この問題にたどり着き、バティックを専門とする人類学者と出会い、研究上の意見交換を行っている。型紙データベースの参照欄に、ある型紙図案が、他技法による染織や他の媒体に応用された例を掲載することで、思いがけない学際的な共同研究が生まれる可能性がある。

## Kerstin Stöver 「The Database “Daphne “ of the Dresden State of Art Collections - an Elementary Tool for a Methodical Scientific Research of the Katagami Collection and a Requirement for International Networking」

### ドレスデン州美術所蔵品データベース「ダフネ」—

### 型紙コレクションの組織的・科学的研究のための初歩的ツール及び国際連携の前提条件として

ドレスデン装飾美術館のテキスタイル目録 No. 21940 には、日本製染色用型紙 約 12,000 枚 (Collection of Japanese Stencils for Fabric Printing. Approx. 12,000 items) が記載されている。

それを裏付けるように、美術館のテキスタイル収蔵庫には、94 箱もの型紙が、目録調査済み「超大型」型紙のポートフォリオと共に収蔵されている。これら型紙は、1889 年に著名な美術商 Hermann Pächter (ベルリンの美術商 R. Wagner art & publishing activity のオーナー) が購入したものである。

装飾美術館のスタッフは、この貴重資料の価値に気づいてはいたものの、100 年以上の間、この類いまれな所蔵品についての大規模な研究や、展示を遂行するチャンスに恵まれなかった。しかしながら、型紙の幾枚かに絵具の痕跡が見えることから、応用芸術学校の指導に用いられたことだけは分かっていた。

2013 年に Museum & Research Foundation からの資金的援助の下、“Research Trips into the Depot (収蔵庫への研究旅行)” という展覧会が企画され、そのため目録を比較研究するチャンスが訪れた。

結果、ドレスデン州美術所蔵品 (KSD: ドレスデン美術工芸博物館) のデジタル化プ

ログラム「ダフネ」の一環として、スタッフ3名が、一年に亘って型紙の記録・計測・記述・撮影に従事し、型紙の総目録を作成することができた。その結果、16,000枚以上の型紙があることが判明した。当該型紙はKSDのウェブサイトにて徐々に公開される予定で、これにより型紙に関心にある世界中の人々が、ネット上で型紙を閲覧可能となる。また、型紙の修復も開始された。

本コレクションの記録・記述は、型紙コレクションの体系的・科学研究の第一段階をなすものであり、これにより疑問点のリストアップ等を進めている。と同時に、KSD傘下の他の美術館・博物館（例えば、印刷・図面博物館）が所蔵する小規模の型紙コレクションとの比較研究も進行している。

研究が進んでいくにつれ、大きな発見がいくつかあった。研究はまだ完成しておらず、様々な疑問にも未だ答えを見つけるには至っていないのだが、本ワークショップでは、研究成果の一端を発表する。

なお、現在、データベース「ダフネ」のプロジェクトは、EUROPEANA等の外部データベースへのデータのエクスポートへと向かっている。これには、メタデータが利用可能となることが前提条件となる。

### 平田美奈子「紅型型紙の調査からデータベース化への方法」

染色における「型紙」の役割は、模様を付けるための「道具」である。琉球王朝の時代から受け継がれている紅型染めでも主に衣裳へ模様を付けるため、同様に型紙が用いられている。「型紙」は「道具」であるため、文献や資料が少ない。そのため、型紙整理の基礎となる情報や分類方法について、先行事例が乏しく、具体的な項目を挙げてまとめることが困難であった。

沖縄県立芸術大学では、収蔵されている鎌倉芳太郎資料の紅型型紙を資料としてデータベース化を行ってきた。型紙のサイズによる整理から始まり、全体像の把握のため、調査・データの収集を行い、それらをもとに紅型型紙データベースを作成した。現在でも、データ構築は引き続き行っている状況である。

発表者は、これまでの紅型型紙のデータベース化への成果と反省点を踏まえ、今回のワークショップのテーマである「型紙資料の活用」に向けて提案が出来ればと考える。

### 堀田結子「ボストン美術館とニューイングランド地方における型紙の受容と活用」

19世紀末のニューイングランドでは、J. ラファージ（1835-1910）やW. S. ビゲロー（1850-1926）、A. W. ダウ（1857-1922）らが型紙を蒐集し、それらはデザインや美術教育の分野で活用された。1880年代にビゲローによってボストン美術館へ寄付された約4600点の型紙は、当初作品に関する「道具」として正式なコレクションとは別に登録されたが、1910年にL. ウォーナー（1881-1955）によってその価値を見直す展示が行われた後、1915年には「研究資料」として改めて番号が付けられた。近年においては、国際的な

型紙研究が活発となるに従い、ボストン美術館でも型紙の保存やデータ管理の方法が見直され、現在は生田ゆき氏の調査資料を元にデータベースの修正と再構築を行っている。本発表では、ボストン美術館とその周辺のコミュニティで様々な評価、活用されてきた型紙の歴史を踏まえた上で、2000年以降美術館で運用されている情報管理システム(TMS)とコレクション検索サイトにおける型紙データの作成について、改善点と今後の展望を含めて報告する。

### 《型紙サミット発表》

#### 永井晃子「甲賀市水口歴史民俗資料館の型紙調査について」

水口（みなくち）宿は東海道 50 番目の宿場町である。東海道に面した甲賀市水口町宇田（うった）の紺屋利兵衛と植の紺屋忠平の両家には合わせて 2,113 枚の染用の型紙が残されていた。創業時期は明らかではないが、江戸時代後半には型染を始めていたと考えられる。また大正 10 年(1921)頃に考案された紗張りが含まれない点や聞き取り調査などから総合的に判断すると、下限は明治時代から大正初年におさまる。

両家の型紙に残された商印のうち形屋六治郎（形六）が全体の約 2 割に押されていた。江州行きの型紙販売商人のうち該当するのは日野を行商圈としていた笠木六治（次）郎であると考えられる。六治郎と日野の商印を共に押す型紙が残ること、京・大坂の商印が含まれることから、近江日野商人による行商の介在が指摘できる。墨書は地元の地名が散見でき、小紋をはじめとする着物、蒲団、油単など、文様は多種多様であり、両紺屋は地域の衣生活を支える役割を果たしたことがわかる。

#### 松野 准子「河内長野市立ふるさと歴史学習館（くろまる館）の型紙調査について」

本発表では、当館が所蔵する型紙の紹介と現状課題について報告する。

当館の位置する河内長野市は大阪府の南東部にあり、東は奈良県、南は和歌山県に接している。当館が所蔵する 1604 点の型紙は、明治期を中心に河内長野市高向地区で営んでいた 1 軒の元紺屋にのこされていたものである。型紙の多くは伊勢（三重県鈴鹿市）で製作され、主に当地域の特産品であった「河内木綿」の文様染めに使われていた。文様には、河内木綿の特徴である菊花唐草や鶴亀・松竹梅など、吉祥柄で大胆な構図が多くみられる。

型紙の調査については、現在、写真撮影（高精細画像・赤外線画像）やサイズ計測、状態確認などを終え、高精細画像の一部はデジタルアーカイブ化している。また赤外線撮影で明らかになった商印や墨書などの情報を「型紙サミット」のメンバーと共有、研究しており、今後はより広いネットワークで情報を共有できればと思う。

#### 鈴木亜季「型紙調査における反故紙の扱いについて—文字情報からわかること—」

江戸時代、伊勢国白子村・寺家村（現在の三重県鈴鹿市）において多くの型紙が生産

され、その型紙は、型売商人によって広く全国各地へ流通していた。伊勢型紙の歴史資料としては型売商人の株仲間に関する文書類が残されているが、その生産や流通の実態は未だに明らかになっていないことが多い。文字として記されなかった部分については、各地に残された型紙の情報を集積することで、より深くその実態に迫ることができると考える。

今回、甲賀市水口歴史民俗資料館での型紙調査において、墨で文字が記された型紙や地紙に反故紙を用いている型紙をみることができた。反故紙には宗門改帳などが用いられており、中には「松阪」と地名を読むことができたものもある。これらは、地紙が作られた年代や生産地を知る手がかりとなる。型紙の持つ情報を読み取ることで、伊勢型紙の歴史研究を少しでも進めることができればと思う。

10月30日（日）

### 生田ゆき「型紙から読み取れること 型紙調査の有効性」

1枚の型紙から、いかに多くの情報を取得するか。型紙調査の成否はこれにかかっている。しかしながら、やみくもにデータを集積しても、結果として時間の浪費となる危険性もはらんでいる。そのため、それぞれの調査で得られた数値や所見が一体何を意味するのか、常に意識的であることが求められよう。

加えて、そこには調査環境の問題も関わってくる。機材や時間、人員など充分でない中で調査を行わねばならない状況に出くわすことも少なくない。その場合、何のデータを捨てて、何のデータを取るのか、すなわち、何を目的として調査を行うのかについて自覚的であらねばならない。

以上のことを踏まえて、本ワークショップでは、過去の型紙調査の事例を紹介しながら、より効果的な型紙調査について参加者とともに考える場としていきたい。

### 木立雅明・山本真紗子・枝木妙子

#### 「立命館大学型友禅図案・型紙における修復作業の実践と課題」

立命館大学では、2002年ごろより明治末～昭和初期の型友禅図案を収集、整理の上画像を撮影し、デジタル・アーカイブとして公開する作業を行ってきた。その過程で問題となったのが、破損している資料の取り扱いである。資料は長期間の保管による埃などで汚れており、型紙への転写の際に切断され、そこから破れが広がるなど、傷みの激しいものも少なくなかった。資料は総数で1万5千枚を超えており、予算や人手が限られる中、大学生が短期間のトレーニングで修復できるような手法を、文化財修復の専門家の指導により実施してきた。2015年度末には、戦後から2010年ごろまで活動していた型染業者より、新たに型紙の寄託を受ける。そこで、型友禅図案の修復の経験を活かし、型紙の性質にあった新たな修復方法を開発。現在、整理作業への適用に向けて試験的に導入している。修復に使う道具や修復範囲の設定など本学の整理作業をもとに、実用的な修復の技法につい

て論じていきたい。

### **加茂瑞穂「型紙データベース構築から活用に向けて」**

立命館大学アート・リサーチセンターでは、2008年より京都市内で型紙を販売していた会社が所蔵する約18,000枚もの型紙のデジタル化を契機として、型紙のデジタル・アーカイブを進め、2014年には型紙データベースを公開した。数万枚という大量の資料整理が可能な背景には、個人ではなくプロジェクトして活動できたことが大きい。

型紙のデジタル・アーカイブ化を通じ、美術工芸作品の分野をまたいで比較研究することも可能となり、学術研究として得られる恩恵も大きい。また、デジタル画像は型紙の専門家による利用に限らないため、型紙を現代生活へいかす活動へも協力することができる。「伝統的な」デザインを現代の生活へ応用する取り組みは、型紙への興味関心を高めるための効果も期待できる。その一方で、型紙を学術資料以外にも活用していくための課題も見えてきた。

本発表では、学術資料として型紙を共有することで得られる情報とともに、研究成果を社会的に還元していく方法・課題について考えてみたい。